

紀伊大島3集落における居住空間の変遷

—傾斜環境における住空間変容の研究 その3—

家族 変容 ライフサイクル

増築 改築 改修

正会員○本多 友常 *1

同 平田 隆行 *2

同 水野美由紀 *3

同 門永 琢 *4

1. 研究の背景と目的

既往研究において、紀伊大島の3集落、大島、須江、檜野には、生活環境に微妙な変化がもたらされていることが明らかになっている。各集落における調査対象家屋の平均敷地面積はそれぞれ大島 157 m²、須江 208 m²、檜野 420 m²、平均建築面積は 94 m²、104 m²、169 m²であり、建蔽率の平均は、60%、50%、40%と差異を見せている。また2階建て住居の分布は大島地区で55.43%・須江地区で29.03%・檜野地区で6.19%であり、小さな島の中にも、地域特性が生み出されていることが明らかとなっている。これは立地条件、生産手段をはじめとした集落の成り立ちに多くを負っていることは明らかであるが、これを住人のライフサイクルと住まい方の変化がもたらす空間的差異としてとらえ、その要因について分析する。

2. 研究の方法と分析の視点

集落全体の間取り実測調査、住戸に対する個別インタビューより得られた家族のライフサイクル表、増改築・改修の歴史、住居内の使い方の変化を集落ごとの特徴としてモデル化することにより、各集落の空間的特徴について検証する。

3地区の住居の変容を、ライフサイクル表から確認すると、(1) 子供の増改築・新築、(2) 家族拡大期の地区内移住、(3) 向老期・退隠期の増改築、(4) 住居内の使い方の組替などの変容が、各家庭ごとに頻繁に行なわれていることが分かる。これらの変容圧力が集落景観に現れてきたものと、家庭内の出来事として住居内部に吸収されてきたライフサイクルの歴史として同一表内にプロットしたものが(表-1)であり、これを空間の変容として表記したものが図-1の増改築変容モデルと、図-2の機能変容モデルである。

3. 増改築変容モデルの特徴

このモデルは集落の物理的な空間的差異となっている特徴を、個別ヒヤリングから導き出したものであり、各集落の特徴を表す形式として、イニシャル記号を付している。

紀伊大島においては、結婚年代にかかわらず、出産期・教育期の家族拡大期に、室数が多くとれる住居を求めて「地区内移住」を行う習慣が認められる。戦後結婚世代

が教育期の後半にさしかかる昭和40年代以降、子供室のための増改築や新築の需要が散見され、昭和40年代捕鯨漁のピークが去り、島内人口の急落による空家の増加が同一時期に重なったため、この傾向が加速される要因になったと考えられる。

また須江・檜野地区では、かつて、対岸の串本・古座方面から建売り住居を解体し、船で材を運ぶ方法で、移築が行われていた例が散見され、移転、移築などの変化にたいする許容度は大きいことが伺われる。

これを背景として、大島集落では、敷地が狭小で増改築するスペースがない場合には、住居を2階化する工夫などが目立っている。

また須江集落では、生活の近代化に伴い、作業スペースとしての庭が居住領域に取り込まれていく傾向の中で、簡易な屋根による分棟の連結や、塀と母屋の間に屋根を架けわたす「さしかけ」が普及し、集落景観の特徴を生み出してきた。

檜野集落においても、さしかけが多く採用されているものの、住居内部からの変容圧力は、敷地面積、建築面積の大きさが包容力として働いており、外部空間の変容としては発現しにくいことが理解される。

このように集落景観を変容させていく形式は、相互に同時混在してはいるものの、集落のアイデンティティに寄与する変容タイプとして、O(大島)型、S(須江)型、K(檜野)型に大きく分類化できることが可能となった。

4. 住機能変容モデルの特徴

3集落の結婚コーホート表からは、向老期・退隠期において、余生を快適に過ごすための準備として、増改築がなされる様子が伺える。同時に各所に手すり設置や、床の段差解消などの高齢化対策、また、万一に備えた客間の増築・改装、メンテナンス整備などが行われている。特に、高齢化対策の住居改装工事は、2000年の介護保険制度スタートにちなんで、串本町においても、住宅改修補助制度の整備が進んだことから、需要が急増している。さらに、書斎用に増改築を行い、趣味や地区役員の仕事のための専用スペースをとる様子なども伺え、平均寿命の延長に呼応して、余生を満喫するための「終の住処」を整備する意図が見受けられる。

前章で見えてきたように、住居内部の機能変容は、納屋の居室化、世代交代による世代間の居住スペースの交代、

Factors for Transformations in a Sloping Setting

Study on the factors of living environmental identities of 3 villages in Kii-oshima

HONDA Tomotsune, HIRATA Takayuki, MIZUNO Miyuki, and KADONAGA Taku

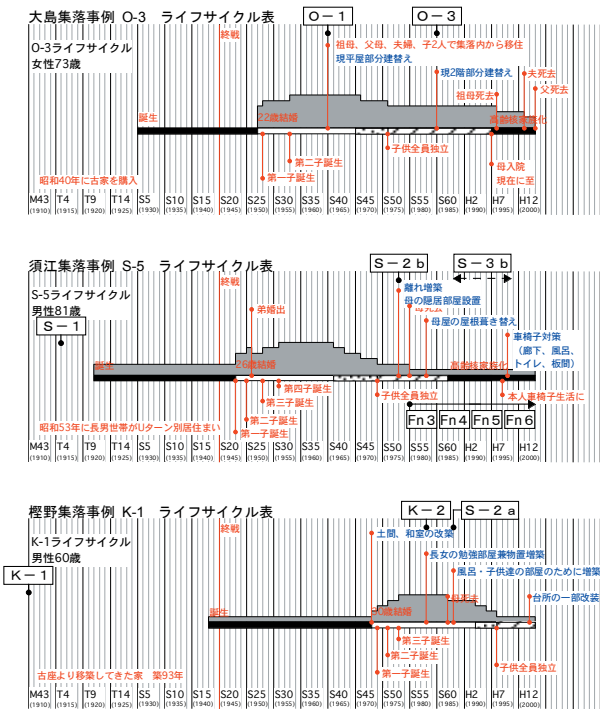


表-1 ライフサイクル表における住空間の変容

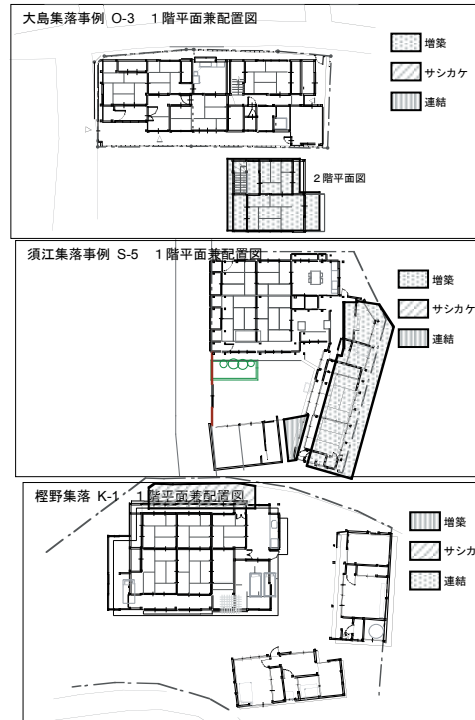


図-1 各住居の特徴を示す事例

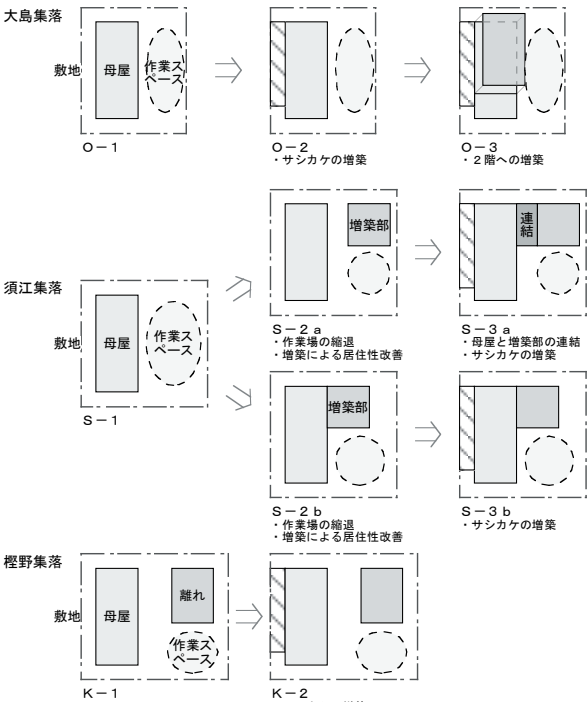


図-2 増改築変容モデル

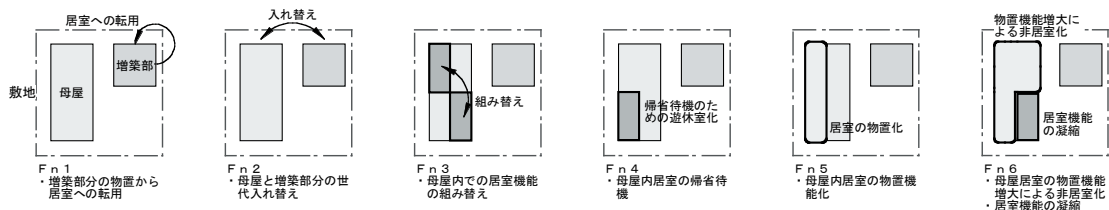


図-3 住機能変容モデル

部屋の転用として、約30年から40年間の近過去の歴史は、住環境変容の速さを物語っている。

単身高齢者世帯の間取りの使い方においては、住居内部での生活範囲が狭くなり、奥の部屋や2階が物置化する傾向と合わせて、機能の縮退減少が顕著になってきており、図-Fn5型からFn6型への移行が急速に起こりつつあるといえる。これに伴い、単身高齢者世帯や要介護者のいる高齢核家族世帯では、日常のメンテナンスにおいて、住居が広すぎることに不満がある反面、盆や正月などに備え、客間をはじめとする室数は確保しておきたいという相反する要求が同時存在しており、遠く離れた子供世帯の帰村を心待ちにしている様子が伺える。

5. まとめ

住居の連結、さしかけ、2階化、転用、増築のありさまが、各集落の地域特性を生み出しており、内部の住機能変容は早い速度で進行しており、機能縮退と増築圧力が、同時並行的に進行している有様が明らかとなった。

*1 和歌山大学システム工学部 環境システム学科教授・工修 Prof., Faculty of systems engineering, Wakayama Univ., M. Eng
 *2 和歌山大学システム工学部 環境システム学科助手・工修 Research Assoc., Faculty of systems engineering, Wakayama Univ., M. Eng
 *3 和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.
 *4 和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.